

海拔0メートルから3003メートルへ

# 立山登山マラニック歓踏記

1998年9月9日

ぎふ長良川走ろう会

武藤 彰

平成10年9月5日、富山で行われた、立山登山マラニックに参加し、無事完踏を果たす事ができました。

この大会は、富山湾の浜黒崎海水浴場の海拔0メートルを出発し、常願寺川堤防～大川寺駅前～極楽坂スキー場～立山駅～称名滝登山道(八郎坂)を通り、弥陀が原に出て雄山の頂上3003メートルに至るレースで、一般の人が電車～ケーブルカー～バスを乗り継いで登るところを1日で走ります。地元の方々の歩こう会の人たちは、このコースを7回(7日)に分けて歩くのだと言っていました。(距離63km、標高差3003m)

朝4時に日本海の浜黒崎海水浴場の暖かい海水に手を浸して、今日の無事を祈りながらスタートしました。いよいよ海拔0メートルから標高3003メートルまでの楽しい旅の始まりです。最初は常願寺川堤防を走りますが、5時半ごろに立山連峰から登って来る日の出に出会いました。横を走る桜井さんからあそこが今日登って行く雄山ですよと教えられ、しっかり臉に刻み込みましたが、この事が後で重大な意味を持つとは思っていませんでした。

コースはどこも最高の眺望でした。エメラルドグリーンな称名川、日本一落差の大きい称名滝、弥陀が原、立山、剣、槍穂等の眺めも最高でした。コース途中ではカモシカの親子や猿の親子に出会いました。

約52キロ走った弥陀が原のエイドに昼12時半頃に到着したのですが、次の60キロ地点(室堂)の関門は午後2時で、残り8キロで1時間半しか残っていません。

エイドの係りのスタッフにも、このペースではちょっと関門には無理ですねと言われてしまいました。その時に、今朝、桜井さんから教えてもらった雄山の日の出のシーンを思い出して、あの海拔0メートルからここまで登ってきて、少しのタイムオーバーで頂上へ行けないなんて、何とも無念だ、絶対にリタイアしないぞ、何としても関門を突破するぞと、自分を奮い立たせ、懸命に登り坂を走って行きました。

走っている横をスタッフの車が何回も通り、そのたびに声援を受け、また、もう車に乗れませんかと甘い誘惑の声を掛けてくれます。一緒に横を走っていた他の二人はそこであきらめて車に乗ってしまいました。

しかし、私は歯を食いしばり、今まで走ってきた野辺山や四万十川100キロの辛さのことも思い出しながら、懸命に走りました。そして、室堂の関門の手前では、スタッフ全員が、もう少しだ、頑張れ、まだ時間はあるよと必死になって声援を送ってくれました。その結果何と、関門の7分前に到着する事ができたのです。不覚にもそのとき感動のあまり、汗と涙と鼻水があふれ出し、泣いてしまいました。すると、スタッフもみんなもらい泣きで感動の涙を流していました。

頂上まではそこから2時間の時間があり、結局12時間制限のところを、11時間34分で完踏する事ができ、またひとつ、大きな思い出ができました。このハプニングで私は、特別に感動賞を貰う事ができました。

今回のレースで学んだのは、やはり諦めてはいけないと言う事でした。この人生、何か困難にぶつかるとうしても楽な方法、安易な道を選ばなくなります。しかし、愚直なまでに、とにかくやってみる事、絶対に最後まで、諦めてはいけない事を改めて学びました。そして、すがすがしい感動の涙は、自分自身を若返らせてくれると感じました。最後に、始めから終わりまで、暖かい心のこもったサポートをして頂いた実行委員長の松原さんをはじめ、大会のスタッフの皆さまに心から感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。



【朝4時スタート地点の富山湾(海拔0M)】



【まだ元気です(称名川沿い)】



【感動の涙を流した室堂のエイド】



【日本一落差の大きい称名滝】



【最後の登り、頑張れ!】



【やった!! 念願のゴール(3003M)】